

聖体礼拝・聖体顕示における教会の教え

菊地東京大司教『聖体顕示、聖体訪問や聖体礼拝』より（2020年4月1日）

聖体訪問や聖体礼拝は、カトリックの長い伝統の中で培われてきた、イエスとの交わりの恵みです。特に、聖体顕示は聖体として現存しておられるイエスと私たち人間が直に向き合うことのできる空間です。そして、聖体礼拝は単なる崇敬ではなく、それを行う人と師イエスとの内的な一致をもたらします。それは靈的聖体拝領にもつながります。

聖体顕示、聖体礼拝の際は、是非、顕示されている聖体の側近くでお祈り下さい。そして、「今ここ」におられる主イエスと親しく交わる一時を持っていただければと思います。

カトリック中央協議会『ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』より（2007年）

79 ミサで記念されるキリストの奉獻は、キリスト教的な生活全体の源泉であり頂点であるから、ミサ以外においても聖体の秘跡に対して、私的にも公的にも信心をささげることを教会は強く勧めている。（略）

80 秘跡の中に現存されるキリストを礼拝するときは、この現存がミサのいけにえに基づくものであり、秘跡的で同時に靈的な交わり（聖体拝領）を目指していることを記憶すべきである。

聖体に対する信心は、キリストの死と復活の神秘に深く参加すること、また、神のいのちをそのからだである教会に絶え間なく注ぐ主に感謝することを目的としている。信者は、主・キリストのもとにとどまって親密さを味わい、主のみ前に心を打ち明け、自分のため、親しいすべての人のため、また平和と世の救いのために祈り、キリストとともに自分の生活のすべてを聖霊において父にささげる。こうして「主の記念祭儀」にあずかって、しばしば天のパンをいただくためのふさわしい心構えが準備される。

それゆえ、各自が自分の生活に応じて秘跡の中の主・キリストを礼拝するよう努力するとともに、司牧者はよい模範を示し、またことばをもって信者を励まさなければならない。

81 なお、聖体に現存される主・キリストの前におけるこのような祈りは、聖体拝領によって得られた主との一致を続けさせ、感謝の祭儀の中で信仰と秘跡によって受けたことを生活と行いの中で守り抜くと決めた約束を更新させる。したがって、天上の糧に支えられ、主の死と復活にあずかって、全生活を感謝のうちに送るよう努めなければならない。各自は善行に励み、社会にキリスト教精神を吹き込み、対人関係のすべてにおいてキリストの証人となるよう心がける。

82 聖体の顕示と賛美式は、聖体に現存されるキリストをたたえ、聖体拝領によって最高度
に実現したキリストとの一致を味わい深めるものであるから、霊と真理のうちに神にささ
げるべき礼拝にとって大きな助けとなる。したがって、聖体賛美式においてはミサとの関係
が明らかにされるように配慮する。そのため聖体の顕示にあたっては、この秘跡を食物、い
やし、助けとして制定されたキリストの意向が不明確になるような仕方や飾りつけなどは
避けなければならない。

聖ヨハネ・パウロ2世 回勅『御聖体の教会』より (2003年)

25 ミサ以外の場での御聖体の礼拝は、教会生活にとってはかりしれない価値を持ってい
ます。御聖体礼拝は、感謝の祭儀と密接に連関するものです。聖なる形態のもとで、キリス
トの現存はミサの後も保たれます。この現存は、パンとぶどう酒の形態が残っている限り継
続するからです。このキリストの現存は、キリストのいけにえによる感謝の祭儀から生じ、
拝領されることを目指しますが、それには秘跡による場合と、霊的なしかたによる場合の両
方があります。司牧者は自らも模範を示しながら、御聖体礼拝の実践を奨励する責務を帯び
ています。とくに御聖体の顕示と、御聖体の形態のうちに現存するキリストに対する礼拝の
祈りを奨励すべきです。

キリストとともに時を過ごし、キリストが愛しておられた弟子のようにキリストの胸元
に寄りかかり（ヨハネ 13・25 参照）、キリストのみ心にある限りない愛を感じるのは、心
地よいことです。もし現代のキリスト者が何よりもまず「祈り方」において優れていなけれ
ばならないなら、聖なる御聖体のうちに現存するキリストのみ前で、しばしのあいだ、キリ
ストと霊的に語り、沈黙のうちにキリストを礼拝し、心からの愛を表す必要があらためて
あることを、どうして感じずにいられるでしょうか。親愛なる兄弟姉妹の皆さん、わたしは
どれほど多くこうした時を持ち、そこから力と慰めと支えを得てきたことでしょう。

御聖体礼拝の実践は、教導職によって繰り返し称賛され、かつ推奨されてきたものであり、
多くの聖人がその模範を示しています。この点でとくに優れた模範となっているのは、聖ア
ルフォンソ・リゴリ（1696-1787年）です。アルフォンソはいいます。「あらゆる信心のな
かで、聖なる御聖体のイエズスへの信心は、秘跡に次いで、もっとも偉大であり、もっとも
神によみされ、もっともわたしたちの助けとなるものです」。御聖体はかけがえのない宝で
す。感謝の祭儀を通じてだけでなく、ミサ以外のとき御聖体の前で祈ることによって、わ
たしたちは恵みの泉そのものに触れることができます。わたしが使徒的書簡『新千年期の初
めに』と『おとめマリアのロザリオ』で提案した精神に従って、キリストのみ顔を観想しよ
うと望むキリスト者の共同体は、ぜひともこのようなかたちでの御聖体礼拝を進んで行っ
ていただきたいと思います。それは、わたしたちが主の御からだを御血を拝領した後、その
実りを長く保ち、豊かなものにするということです。